

## 青年期を対象とした性教育プログラムの効果の検討

——性的自己決定の向上を目指して——

田原歩美

福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：青年期、性教育プログラム、性的自己決定

### はじめに

思春期にある若者たちの性意識や性行動の変化はめまぐるしく、性に対して積極的かつ開放的になる一方、マスメディアや友人の性情報に翻弄され、規範意識や抵抗感は低下している。中学生から高校生までに性経験がある者は、女子 46%、男子 47%と年々増加傾向にあり（日本家族計画協会, 2008）、性交の動機として、愛情や興味本位によるものが多くあげられており（今野・西脇, 2006）、従来のセックス＝生殖あるいは結婚という性意識は薄れ、セックスを愛情表現のひとつとして捉える考えが強まっていると考えられる。また、兵庫県ヒューマンケア研究機構（2003）は、退屈感や享楽感、虚無感と徒労感の強い者ほど、快楽や従属関係を重視した性意識や性行動をとるという関連を見出しており、現代の若者たちは、人間関係の希薄さや日常生活への不満などから、セックスに快楽を求める傾向にあると考えられる。このような性意識の変化は、10代の人工妊娠中絶や性感染症の増加、恋愛中のカップルにおける支配・従属関係からおこるデートDV、性的マイノリティへの偏見など、性に関する問題を多様化、肥大化させ、若者の性を危機的な状況に追いこんでいる。

本来、性意識や性行動は、自分自身のものであり、自分で培っていくべきものである。自分自身のからだや心に関する性的変化について理解することや、自分の性行動をどのように管理し、どのように性と生について考え、決定していくか、そのすべての決定権は自分自身にある（今野, 2002）。しかし、若者の性意識は、愛情とセックスの結びつきや快楽重視の考えが強く、特に、イニシヤチブをとる男性とそれに従う女性という構造が強調され（赤澤, 2008）、自分の意思を無視し、相手に合わせた行動をとり、自らを危険な状況に追い込んでいる。

危険な性行動をとる若者が多い中、自分のからだを守るための行動へ結びつかせる正しい知識を持たせることや、パートナーとの交渉スキルなど、性的自己決定能力を高める教育が重要となってくるだろう。性的自己決定とは、性（生殖と関係した性だけでなく、生殖を目的としない性も含む）に関わる事柄について自らの責任で選択し決定できることであるが（東, 2008；中里見, 2007）、性に関わることは関係性の問題であり、相手とのコミュニケーションや多様な性を理解していくことが必要となる。自分で考え決定するという意思決定だけでなく、愛情本位にならないようなパートナーとのコミュニケーション能力を高めることや、自分とは異なったセクシュアリティ観を容認すること、つまり他者を理解し、受容しながら、自らの責任で選択し決定できることこそ、本当の意味での性的自己決定といえよう（田原, 2010）。

若者たちの性的自己決定を高めるためには、性に対する理解を促進させ、偏見を解消させることが重要であることから、性教育の見直しと実践が求められている。しかし、従来の性教育は、「生殖の性」を主とした内容がほとんどであり、性行為は異性間のみ許された行為である、という教育方針が多いことが指摘され、児童・生徒の性についての肯定観や自己決定観を育てているとはいえない（今野, 2002）。関塚・関・笹川・三本松・伊藤・小野・芳賀・若田・稲垣・岩中（2004）によると、高校生や大学生の性感染症予防や避妊行動は不十分なものであり、危険性の高い行動をとっている者が多く、忠津・長瀬・藤原（2006）は、自己のからだを守るための行動へ結びつかせる正しい知識を持たせる性教育が重要であり、心理・行動的側面について指導する必要があることを指摘し、岡部・佐鹿・大森・久保・宍戸・安藤・坂口（2009）は、異性との付き合い方や人格の尊重

など、若者が求める性教育内容を充実させ、性を大切にすする心の醸成が必要であると述べている。また、避妊や性感染症予防を阻害する要因として、性役割意識の強さが関係していることから（上野，2008）、ジェンダーの観点を取り入れた性教育も必要であるといえよう。

そして、近年は、性的マイノリティの人々がメディアを通して活躍し、性的マイノリティに対する認知度が高まっていながら、従来の性教育の中では、性的マイノリティを取り扱っているものはほとんどなく、性的マイノリティに関する知識が十分ではないため、いまだ偏見の中におかれている。田原（2009）は、知識を与えるだけでも、性的マイノリティに対する認識の変化が高まることを指摘していることから、性教育の中で、性的マイノリティを学ぶことは重要であるといえるだろう。また、若者のカップル間における深刻な問題として、デートDVへの関心が高まりつつも、被害者・加害者は増加傾向にある。小泉・吉武（2008）は、DV、デートDVに関する意識改革や正しい知識を深めることが重要であることを示唆しており、デートDVを未然に防ぐためのデートDV予防（防止）プログラムが多く実施されていることから、性教育の中で、デートDVを取り上げることは、若者たちの性的自己決定を育むための重要な要素であると考えられる。

そこで、本研究は、従来の性教育の不十分である点を改善し、性的自己決定力を高めるための、独自の性教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とする。本研究におけるプログラムの独自点として、第一に、性教育であまり取り上げられない、デートDVと性的マイノリティを性教育の内容として取り入れ、ジェンダーやセクシュアリティの観点から知識を習得させる内容を考案する。

第二に、グループディスカッションを取り入れることである。性に関する相談相手に、友人をあげる人が多いことから、性教育には、年齢の近い者や同級生とのディスカッションを取り入れることで、より性的自己決定を高めることができるのではないかと考えられる。忠津・長尾・進藤・梶原・高見（2009）は、同年代の者が相談相手となることが望ましく、意思決定にまで影響を与える可能性が強いことから、早い段階でのピアカウンセリングが効果的であることを示唆している。ピアカウンセリングとは、人間の成長と心の健康に関する知識とともに、アクティブリスニングと問題解決スキルを用いて、年齢、社会的地位、抱えている問題などにおいて、立場が同様である人々に、ピアの意識を持って行うカウンセリングのことである（高村・渡辺，2005）。本プログラムは、ピアカウンセリングの手法を参考にし、大学院生による講義と、大学生や大学院生をファシリテーターとした、小集団のグループディスカッションを取り入れ、性的自己決定力が高まるかどうかの効果を検証する。

## 方法

**参加者** 事前調査、事後調査で無回答、記入漏れのある者および性教育プログラムの講座を1度も受講していない者を除いた、中国地方の大学2年生、女子10名、男子20名、合計30名と高校1年生、女子39名、男子28名、合計67名。

**性教育プログラムの内容** デートDV、性感染症・避妊と中絶、性的マイノリティの3つのテーマを設定した。各テーマのプログラム実施時間は、25分2セッションの50分とし、3日にわけて実施した。前半は、定義や用語説明などの講義を行い、後半は、参加者6、7名のグループにファシリテーター1名が参加し、ディスカッションを行った。なお、高校生の性的マイノリティのプログラムに限り、前半にディスカッション、後半に講義を行った。

### 質問紙の構成

#### ① 参加者の恋愛経験について（事前のみ）

現在もしくは過去にパートナーを持つ人に対しては、デートDV（身体的・言語的・心理的暴力）の被害経験・加害経験があるかどうか（「ある」、「ない」の二件法）について尋ねた。また、パートナーの有無に関係なく、性経験があるかどうか（「ある」、「ない」の二件法）について尋ねた。

## ② 性的自己決定について

性的自己決定を測定する尺度として、田原(印刷中)の性的自己決定尺度を用いた。内容は、性の自己受容(例:自分のからだを大切にしていると思うなど)、性の多様性(例:性的マイノリティの人のそのままを認めることができると思うなど)、性の解放性(例:エイズや性感染症に感染した場合、相手と一緒に病院へ行くことができると思うなど)、愛情本位のセックス(例:セックスは生殖のためだけではないと思うなど)の4つの下位尺度で構成された、合計13項目であった。回答は、あてはまらない(1)～あてはまる(5)の5段階評定とした。

## ③ 性的対処行動について

性的自己決定に基づいて、性に関する対処行動をとることができるかどうかを検討するため、パートナーからの性的要求、妊娠したときの自分の意思決定、同性からの告白の3つの状況を設定し、3件法で回答してもらい、その選択肢を選んだ理由を、自由記述で回答してもらった。回答は、それぞれの状況によって選択肢の内容が異なり、パートナーからの性的要求については、①「今日はそういう気分ではない」と、パートナーにきちんと伝えようと思う、②嘘をついて、その場をごまかしてしまうと思う、③断れないので応じてしまうと思うの3つ、妊娠したときの自分の意思決定については、女子の場合、①産む・産まないは、自分自身で決めるべきなので、自分で決めようと思う、②産む・産まないは、自分自身で決めるべきだと思うが、反対されたらあきらめようと思う、③産む・産まないは、親やパートナーの意見を尊重した方がいいので、従うと思うの3つ、男子の場合、①パートナーの意見を尊重し、自分もできる限り協力しようと思う、②パートナーの意見を尊重したいが、自分の状況を考えると、判断に迷うと思う、③パートナーの意見よりも、自分の気持ちを優先しようと思うの3つ、同性からの告白については、①恋愛の対象でないならきちんと断り、今後も友人として接することができると思う、②きちんと断れると思うが、今後どのように接していけばいいかわからないと思う、③同性から告白なんて考えられないし、友人としても二度とつきあえないと思うの3つとした。

## ④ 本プログラムの受講回数とプログラムに対する感想について(事後のみ)

本プログラムへの参加の程度を把握するため、事後調査では、参加したプログラムにチェックをつけてもらい、それぞれ「印象に残っていること」について、自由記述による感想を求めた。

**手続き** プログラム実施前(大学生:2010年6月下旬,高校生:2010年7月下旬)に、1回目の質問紙調査を実施した。大学生、高校生ともに、事前に授業を受け持つ教員へ調査とプログラム実施依頼の旨を伝え、質問紙を配布し、授業の初めあるいは終わりに実施した。大学生は、2010年7月6日、13日、20日の3回にわけてプログラムを実施し、高校生は、2010年8月30日、9月6日、13日の3回に分けてプログラムを実施した。プログラム実施後(大学生:2010年7月下旬,高校生:2010年9月下旬)、授業の初めあるいは終わりに、2回目の質問紙調査を実施した。

なお、倫理的配慮として、事前調査、事後調査ともに、質問紙を配布する際、調査内容について説明し、回答したくない項目は、無回答・無記入でもよいことを説明し、質問紙を封筒に入れて回収した。

## 結果と考察

### 参加者の恋愛経験の実態

参加者の恋愛経験について、パートナーのいる(過去にパートナーがいるものを含む)女子は、大学生10名(100%)、高校生21名(54%)、男子は大学生12名(60%)、高校生19名(70%)であり、その中でデートDVの被害経験がある女子は、大学生1名(10%)、高校生1名(5%)、男子は、大学生2名(10%)、高校生1名(5%)であり、デートDV経験の加害経験がある女子は、大学生、高校生ともに0名(0%)、男子は、大学生2名(10%)、高校生1名(5%)であった。性経験がある女子は、大学生5名(50%)、高校生3名(8%)、男子は、大学生11名(55%)、高校生1名(4%)であった。恋愛経験については、十分な回答が得られなかったため、今回の分析

からは除外した。

**プログラム実施前後の性的自己決定**

プログラムの効果を検討するため、性的自己決定尺度の下位尺度ごとに、学種×性別×調査時期の3要因分散分析を行った(表1)。

表1 学種×性別×調査時期の3要因分散分析の結果

	学種	性別	調査時期				主効果			交互作用			
			実施前		実施後		学種	性別	調査時期	学*性	学*時	性*時	学*性*時
			平均	SD	平均	SD							
自己受容	大学生	女子	3.50	0.22	3.56	0.20	2.26	0.07	0.00	1.27	0.04	0.82	0.08
		男子	3.36	0.15	3.33	0.14							
	高校生	女子	3.54	0.11	3.62	0.10							
		男子	3.74	0.13	3.64	0.12							
多様性	大学生	女子	3.35	0.26	3.95	0.23	7.44 *	13.45 *	24.40 *	0.39	3.18	0.03	4.31 **
		男子	3.00	0.18	3.30	0.16							
	高校生	女子	3.26	0.13	3.35	0.12							
		男子	2.43	0.15	2.77	0.14							
解放性	大学生	女子	3.35	0.33	3.65	0.28	3.85	5.01 **	6.70 **	0.51	0.00	0.09	0.29
		男子	3.95	0.23	4.20	0.20							
	高校生	女子	3.17	0.17	3.35	0.14							
		男子	3.38	0.20	3.73	0.17							
愛情本位	大学生	女子	3.50	0.26	3.65	0.25	8.36 *	3.35	0.16	0.22	0.58	0.39	0.00
		男子	3.93	0.18	3.98	0.18							
	高校生	女子	3.17	0.13	3.19	0.13							
		男子	3.45	0.16	3.36	0.15							

\*p<.01, \*\*p<.05

その結果、性の自己受容においては、性別および調査時期の主効果、交互作用のいずれにおいても有意な差はみられなかったが、性の多様性、性の解放性、愛情本位のセックスについては有意な差がみとめられた。

性の多様性では、学種、性別、調査時期の主効果がそれぞれ有意であり(順に、 $(F(1, 93) = 7.44, p = .008)$ 、 $(F(1, 93) = 13.45, p = .000)$ 、 $(F(1, 93) = 24.40, p = .000)$ )、大学生のほうが有意に高く、女子のほうが有意に高く、プログラム実施後のほうが有意に高かった。また、学種、性別、調査時期の2次の交互作用が有意であったため $(F(1, 93) = 4.31, p = .041)$ 、下位検定を行った結果、プログラム実施前における学種×性別の単純交互作用が有意であり $(F(1, 93) = 8.94, p = .004)$ 、女子における学種×調査時期の単純交互作用が有意であったが $(F(1, 93) = 8.94, p = .004)$ 、他の単純交互作用は有意ではなかった。そこで、学種と性別および学種と調査時期の単純・単純主効果を行った結果、女子大学生においては、プログラム実施後に有意に高く $(F(1, 93) = 10.61, p = .002)$ 、男子大学生においては、プログラム実施後に有意に高く $(F(1, 93) = 5.31, p = .023)$ 、男子高校生においては、プログラム実施後に有意に高かった $(F(1, 93) = 9.50, p = .003)$ 。そして、高校生のプログラム実施前において、女子の方が有意に高く $(F(1, 93) = 16.21, p = .000)$ 、高校生のプログラム実施後において、女子の方が有意に高かった $(F(1, 93) = 8.35, p = .005)$ 。この結果をまとめると、女子高校生以外ではプログラム実施後に性の多様性への関心が高まり、女子高校生はプログラム実施前から性の多様性への関心が高かったといえるだろう。

この結果は、田原(2009)の結果と同様であった。今まで性的マイノリティを学ぶ機会が少なかったことから、知識を得ることによって、性の多様性に理解や関心を示し、身近な問題として捉えられるようになり、意識に変化がみられるようになったと考えられる。また、女性の方が、性の多様性を重視しており、今までの先行研究(田原, 2009; 和田, 1996他)の結果と一致するものとなった。男性は、男尊女卑の考えが根深い社会の中で、自ら

の男性性を示すには同性愛者（特に男性同性愛者）は脅威的な存在であるため（上野，2008），同性同士の結びつきや「男性らしくない」ことに理解や関心を示しにくいと考えられる。しかし，男子高校生，男子大学生ともに，プログラム実施後に多様性への関心が高まっていることから，本プログラムを通して，多様性の面での性的自己決定は高まったといえよう。そして，学種によって差があり，大学生のほうが多様性に対する関心は高かったことについてであるが，大学生になると，コミュニティが多様化し，恋愛経験や社会経験などを通して多様な人間関係を築けるため（大井・宮本，2009），大学生の方が，知識の習得や社会的関心が豊富になり，性の多様性についても関心が高まったのではないかと考えられる。

性の解放性では，性別，調査時期の主効果が有意であり，男子のほうが有意に高く（ $F(1, 93) = 5.01, p = .028$ ），プログラム実施後のほうが有意に高かった（ $F(1, 93) = 6.70, p = .011$ ）。すなわち，男子のほうが解放的であり，プログラム実施後のほうが解放的であるといえる。男性の方が高かったことは，高橋（2003）が指摘するように，女性の場合，性に対する羞恥心やタブー意識による禁欲の必要性意識が，否定的セックス観を強めているため，性について解放的でないと考えられる。また，男性が女性の上に立つような社会の仕組みなどの支配・従属関係を基盤としたジェンダー・ステレオタイプから，女性は性の被害者になりやすく，恐怖や不安などから相手と話し合うという行動を鈍らせているのではないかと考えられる。しかし，プログラム実施後に解放性は高くなっており，本プログラムにおけるディスカッションが効果を持っていたと考えられ，同年代と性について語り合うことで，性を語ることに對して，ためらいや恥といった意識が薄れてきたのではないかと考えられる。

そして，愛情本位のセックスでは，学種の主効果が有意であり（ $F(1, 93) = 8.36, p = .005$ ），大学生のほうが有意に高かった。大井・富田・高村（2002）は，愛情を深めあうことも性の重要な役割であると指摘しており，本プログラムに参加した大学生の過半数以上が，性経験を持っていたことから考えると，性経験を通して，セックスと愛情は切り離せないものであるという意識が高まるため，大学生の方が愛情本位のセックスが高まったのではないかと考えられる。

### プログラム実施前後の対処行動

本プログラムが性の対処行動にどのような効果を与えているか検討をするため，男女別に，プログラム実施前後における，パートナーからの性的要求，妊娠したときの自分の意思決定，同性からの告白のそれぞれの対処行動ごとに $\chi^2$ 検定を行った。なお，大学生の参加者数が少ないため，対処行動は，学種を込みにして検討した（表2）。

表2 性の対処行動における男女別プログラム実施前後の比率

対処行動	選択	女子		選択	男子	
		事前	事後		事前	事後
パートナーからの性的要求	断る	61%	76%	断る	40%	54%
	ごまかす	27%	18%	ごまかす	21%	17%
	応じる	12%	16%	応じる	40%	29%
妊娠した時の自分の意思決定	自分で決める	71%	78%	相手を尊重	67%	73%
	周囲の反応による	12%	22%	自分の状況による	31%	21%
	相手に従う	16%	0%*	自分が最優先	2%	6%
同性からの告白	今まで通り	51%	51%	今まで通り	52%	42%
	今後が不安	47%	47%	今後が不安	38%	52%
	無理	2%	2%	無理	10%	6%

\* $p < .05$

その結果，女子においては，「妊娠したときの自分の意思決定」について，「相手に従う」と回答した者がプログラム実施後に有意に減少した（ $\chi^2(2) = 9.59, p = .008$ ）。すなわち，妊娠したときの自分の意思決定について，プログラム実施後に，相手に従うだけではなく，より自分の意思を大切に決定するということが明らかになった。本プログラムでは，中絶における女性の心身の健康問題や出産するか否かは女性に決定権があることなど

の講義を行っていたため、プログラムを通して、自らのからだにおこる危機への高まりや女性に決定権があることを認識し、妊娠したときの自らの意思決定を高めることができたのではないかと考えられる。

しかし、その他の対処行動については、プログラム実施前後で有意な差はみられなかった。これは、パートナーからの性的な要求と妊娠したときの意思決定については、プログラム実施前から、約半数以上が「きちんと断る」「自分で意思決定する（男子は相手の意思を尊重する）」と回答していることから、プログラムの有無に関わらず、自らの性的自己決定に基づいて対処行動を実行できているのではないかと考えられる。また、同性からの告白については、性的自己決定では、プログラム実施後に、多様性を容認するようになってきたが、対処行動については大きな変化がみられなかった。自由記述より、戸惑いや相手との関係性に対する不安があらわれているため、今後は質的な分析も含めて検討する必要があるだろう。

### 総合考察

性的自己決定の性の多様性と性の解放性については、プログラム実施後に上昇したことから、性的マイノリティについての内容と同年代との討論や大学生、大学院生がファシリテーターとして関わるといふ、ピアカウンセリングの手法は効果をもっていたと考えられる。しかし、性の自己受容と愛情本位のセックスではプログラム実施による変化はみられなかった。そして、性に関する対処行動について、女子は、妊娠したときの自分の意思決定はプログラム実施後に上昇したことから、妊娠に関する対処行動への効果があったと考えられる。しかし、その他の対処行動については、プログラム実施後にやや自己決定のレベルが上昇したが、実施前から高かったために有意水準に達しなかったと考えられる。また、プログラムがすぐに認知や行動に影響を及ぼすものではないと考えられ、性の多様性については、理解が深まったが、同性からの告白には抵抗が強いといえるだろう。以上のことから、本プログラムが、現代の若者のニーズにかなったものであったとは言い切れず、プログラムの更なる充実が期待される。また、今回使用した性的自己決定尺度および性の対処行動の質問が、本プログラムにおける性的自己決定や性の対処行動を測定するものとして、妥当なものであるかの検討を要する。今後は自由記述に対する質的分析を行い、より効果的なプログラムの実施方法、内容を検討する。

#### 【謝辞】

本研究は、大学の教員ならびに学生の皆様、高等学校の教員の皆様ならびに生徒の皆様、アンケート調査や本プログラムの参加にご協力いただきました。また、本論文を作成するにあたり、指導教官の青野篤子教授から、様々なご指導を賜りました。記して感謝致します。

### 引用文献

- 赤澤淳子 (2008). 恋愛とジェンダー 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.112-130.
- 東 優子 (2008). HIV 感染への脆弱性とセクシュアル・ヘルス/ライツ 社会問題研究, 57, 27-39.
- 兵庫県ヒューマンケア研究機構 (2003). 若者の価値観・経験と性 青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告書, 69-92.
- 今野洋子 (2002). 性の自己決定に果たす性教育——避妊教育をテーマとして—— 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 40, 81-96.
- 小泉奈央・吉武久美子 (2008). 青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75.

- 今野本綿子・西脇美春 (2006). 大学生における性知識・性モラルと性行動との関係 山形保健医療研究, **9**, 33-47.
- 中里見 博 (2007). ポスト・ジェンダー期の女性の性売買——性に関する人権の再定義—— 社会科学研究, **58**, 39-69.
- 日本家族計画協会 (2008). 2008年「児童・生徒の性意識・性行動調査」結果の概要 社団法人日本家族計画協会 2008年11月12日 <<http://www.jfpa.or.jp/01-topics/index081112.html>> (2010年11月24日)
- 岡部恵子・佐鹿孝子・大森智美・久保恭子・宍戸路佳・安藤晴美・坂口由紀子 (2009). 大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題 (第1報) 母性衛生, **50**, 343-351.
- 大井けい子・富田真理子・高村寿子 (2002). 妊娠期の性生活——妊婦とその夫の性の認識と満足の違い—— 日本女性心身医学会雑誌, **7**, 220-225.
- 大井由莉菜・宮本正一 (2009). 青年期における異性との友人関係の発達 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, **58**, 177-186.
- 関塚真美・関 秀俊・笹川寿之・三本松 恵・伊藤千春・小野真希・芳賀絵里子・若田知子・稲垣利矢子・岩中美季 (2004). 大学生の避妊行動とSTD予防行動における自己決定意志 思春期学, **22**, 149-156.
- 忠津佐和代・長尾憲樹・進藤貴子・梶原京子・高見千恵 (2009). 大学生の性感染症予防行動および避妊行動に対する意識・態度の実態調査——青年期ピアカウンセリングの基礎資料として—— 川崎医療福祉学会誌, **19**, 93-103.
- 忠津佐和代・長瀬尚子・藤原 望 (2006). 思春期の性教育ニーズの検討 (1) ——性教育内容と教育者—— 川崎医療福祉学会誌, **15**, 635-638.
- 高橋久美子 (2003). 親の性意識が性教育に及ぼす影響——父親と母親のセックス観をもとに—— 日本家政学会誌, **54**, 59-67.
- 高村寿子・渡辺純一 (2005). カリキュラム展開の実際・1——ピアカウンセリングとは—— 高村寿子 (編) ピアカウンセリング・マニュアル 小学館 pp.34-60.
- 田原歩美 (2009). 高校生を対象とした性教育ピア・カウンセリングの効果——性的マイノリティに対する態度変化のテキストマイニング—— マクロ・カウンセリング研究, **8**, 26-39.
- 田原歩美 (2010). 性的自己決定と性経験の関連性について 福山大学こころの健康相談室紀要, **4**, 59-66.
- 田原歩美 (印刷中). 青年期における性的自己決定に関する研究——性的自己決定尺度の作成—— 公益信託松尾金蔵記念奨学基金 (編) 明日へ翔ぶ2 風間書房
- 上野淳子 (2008). セクシュアリティ 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.307-321.
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度——性および性役割同一性による差異—— 社会心理学研究, **12**, 9-19.

The effect of sex education programs on adolescents' sexual self-determination

Ayumi Tahara

This study attempted to verify the effect of the student oriented sex education program on adolescents' sexual self-determination. The program was administered to 30 university students and 67 high school students via lectures and group discussions based on themes such as dating violence, sexual transmitted diseases and contraception, and sexual minority. The students responded to the sexual self-determination scale and for the questions asking their sexual coping behavior before and after the program. Permissiveness toward various sexual orientations and sexual liberation increased after the program. Also, women students showed a more self-determined response to hypothesized pregnancy after the program. The program focused on the actual problems of young women, and group discussions facilitated by university students were thought to be effective in some degree. Even improved programs and the scales measuring the effectiveness will be expected to develop.

(指導教員：青野篤子)